様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００８１５

研究課題名（和文）英語を話す意思(WTC)への刺激要因と阻害要因の調査

研究課題名（英文）Willingness to Communicate in Adolescent EFL Learners

研究代表者
豊田　順子（Toyoda, Junko）

関西外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：４０６１８１０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は未開拓である中学生の英語のWillingness to Communicate (以下L2 WTC: 外国語を話す意思)を調査した。大阪府内の中学校でタスク中心学習によって介入授業を行い、再生面接法を用いて、L2 WTC の刺激要因と阻害要因を調査した。分析した結果、調査対象者たちは2つの影響：1) 対話相手からの影響、2)タスクコンディションからの影響を受けて、L2 WTCが変動することが明らかになった。上記授業介入期間前後に、2回の半構造化インタビューを行い、調査対象者の心理的変化を詳細に記録し質的分析した。その結果、3つの代表的な英語学習者の変容タイプを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1. L2 WTC研究は英語圏であるESL環境での調査が主流である。日本の公教育現場の中学校英語教育においては未開拓であるため、先駆的に開拓する必要がある。2. 「再生面接法」など、世界で主流となっている研究手法を取り入れ、研究目的の解明に挑んだ。得られたデータや知見は、日本の応用言語学分野における研究の発展に貢献できる点で意義深い。3. 学校教育で英語能力を向上させる取り組みが行われてきた。しかし、学習者の英語を話す意欲が育たなければ、英語を使うグローバル人材の育成は困難となるだろう。「英語を使う意思」であるL2 WTC研究は、日本の英語教育発展に極めて重要と言える。

研究成果の概要（英文）：This study investigated Willingness to Communicate in a second language (L2 WTC) of junior high school students learning English in school, which has been under-explored. Several intervention lessons created based on task-based instruction were implemented at a junior high school English class in Osaka. Qualitative data were obtained through stimulated recall interviews with 7 participants. As a result of the analysis, it was found that the participants' L2 WTC levels were influenced by two factors: 1) the influence of the conversation partner and 2) the influence of the task condition. In addition, through analyses of semi-structured interviews with the participants during the intervention period, it was revealed that they showed three different patterns of psychological changes regarding L2 WTC and L2 communication affect.

研究分野：外国語教育

キーワード：L2 WTC　Situational L2 WTC　Task-based learning　中学校英語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

今日、社会、経済、教育、様々な分野でグローバル化が進み、国際的共通言語である英語を用いて国際的な取り組みや仕事を行うことは常態化している。このような社会背景から、文部科学省は 2003 年より『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』を提示し、子どもたちが 21 世紀を生き抜くために「英語を使える人」になるという教育目標に掲げて、学校教育現場で第二言語コミュニケーション実践活動推進してきた(小学校学習指導要領外国語活動・外国語編, 2017 年 b; 中学校学習指導要領外国語活動・外国語編, 2017 年 a; 高等学校学習指導要領外国語活動・外国語編, 2018 年 a)。目標達成のために、英語の授業で学習者が積極的かつ頻繁に英語を使うことが理想であるが、先行研究（たとえば、King, 2013a, 2013b; Yashima et al., 2018）の調査によれば、日本の大学英語授業内での学生の寡黙さが指摘されている。英語を 6 年間またはそれ以上学んだ大学生がいつから英語使用に非積極的になったのか、また大学入学以前の英語学習者たちも同様なのか、という疑問を抱いた。そこで、長年応用言語学で研究蓄積がある Willingness to Communicate in second language (L2 WTC: 第二言語を使う意思)という概念を使い、大学入学以前の英語学習初期段階の学習者の話す心理を調査しようと考えた。 欧米やアジアとは違い、日本の教育現場での L2 WTC の研究は数例しかないため、本研究この分野での研究の開拓を目指した。

２．研究の目的

本研究は、英語学習初期段階の中学生を対象に、1) Situational L2 WTC (状況ごとに変化する L2 WTC) に影響を与える要因を把握し、2) L2 WTC 発達の様相を理解する事を目的として行われた。これら 2 つの目的を達成するために 2 つの実証研究(研究 1 と研究 2)を行った。

３．研究の方法

調査対象校である大阪府内公立中学校で、英語使用経験が豊富な中級英語学習者 2 名と初級英語学習者 5 名を含む中学 3 年生を調査対象者とした。研究参加者は、介入授業に参加した日本人英語教員・アメリカ人 ALT・調査対象者以外のクラスの生徒である。対象校の校長・関与する教員と生徒、および参加者の保護者へ説明会を実施し、調査対象者の保護者および校長と書面による同意書を交わした。介入授業方法は、Ellis (2003)を参考にして、Task-based learning (TBL:タスク中心学習)のレッスンを日本人英語教員とアメリカ人 ALT とともに作成し、2 学期の間 5 回導入した。その各授業での調査対象者のタスク活動時の録画と録音を行った。 Gass と Mackey (2017) の再生面接法に従って、各タスク授業終了後 72 時間以内に、研究者と助手が各調査対象者に録画や録音を示しながら、彼らに深層心理を語ってもらった。さらに、L2 WTC の先行研究（Cao & Philp 2006; Cao, 2014; Yashima et al., 2018）を基に、調査対象者の英語学習姿勢・動機づけ・L2 WTC に関する半構造化面接質問を作成し、授業介入前と介入後に各調査対象者へ実施した。これらから得られたデータを Strauss と Corbin (2015) の帰納的分析手法「マイクロアナリシス」に基づいて、質的分析した。分析結果は、Lombard、Snyder-Duch、および Bracken (2010) の方法に従い、カッパ係数を算出し、検者内信頼性を確認した。

４．研究成果

4.1. 研究１の結果

研究 1 の目的は、Situational L2 WTC に影響を与える要因を探ることであった。これを探るために、前述のデータ分析をした結果、対象者たちは 2 つの影響：**1) 対話相手からの影響**、**2) タスクコンディションからの影響**を受けて、Situational L2 WTC が変動する、すなわち、英語を話す気持ちがアップダウンすることが明らかになった。表 1 は、質的分析より抽出された「対話相手からの影響」に関するコードを 5 つのカテゴリーを示している。1 つ目のカテゴリーは

「対話者の積極的なコミュニケーションの取り組み」は、すべての調査対象者が、対話者相手が手持ちの英語を駆使し、必死に意味交渉を行い、やり取りを頻繁に行う姿勢を見せるとき、「もっと英語を話したい」という心理になったことを示している。一方、カテゴリー2「対話者のコミュニケーション努力の欠如」は、カテゴリー1 の内容とは反する対象者の Situational L2 WTC を減退させる要因である。タスク中、対話者が上記のようなコミュニケーションの努力をしないとき、調査対象者たちは一様に話す意欲が失せると回答した。彼らが認識するコミュニケーションの努力の欠如要因には、発話頻度の低さ、沈黙の長さと頻度、非言語コミュニケーションの欠如などが含まれた。カテゴリー3「対話者と自分の英語力の差に対する認識」は、初級英語学習者が、自己と対話者との英語能力を比較することで、Situational L2 WTC 変動することを示す。特に、英語使用経験が少ない初級英語学習者は、自分と同じレベルの対話者とペアーを組む時は、リラックスした気分で、自信をもって英語を話せると回答した。しかし、彼らが、英語が流暢な 2 名の中級英語学習者のいずれかとペアーを組む時は、彼らの英語力と自己の英語力との差に圧倒され、不安を感じ、自信を喪失し、結果として話す意欲を喪失すると回答した。カテゴリー４は中級英語学習者が持つ「対話者と自分の英語力の差に対する認識」についてである。英語が流暢な彼らは、タスク中、初級英語学習者の拙い語彙力・リスニング・スピーキング能力から起こる意思疎通困難を常に心配しており、英語のやり取りに集中できないと語った。最後の対話相手からの影響要因は、カテゴリー5 の「対話者との関係」である。調査対象者たちは、親しい対話者には自己開示でき、自分の胸の内を語ることができ、会話を楽しむことができるため、話す意欲が湧くと回答した。一方、関係が良好でない対話者や話したことがない馴染みのない対話者とは、自己開示しにくく、話す意欲が減退すると答えた。

表 1

対話相手から影響

カテゴリー1: 対話者の積極的なコミュニケーションの取り組み
やり取りの頻繁さ
英語による交渉努力 (例．何度も相手の言ったことへの確認を行う)
非言語による交渉努力 (例．もっと説明してほしいと手招きをする)
非言語コミュニケーションの取り組み（例．アイコンタクトや笑顔を維持する）
カテゴリー2: 対話者のコミュニケーション努力の欠如
発話頻度が低い
沈黙が多く、長い
非言語コミュニケーションの努力の欠如（例：アイコンタクトや笑顔の欠如）
カテゴリー 3: 対話者と自分の英語力の差に対する認識（初級英語学習者のケース）
自分と同じ初級英語話者と英語で話すときはリラックスした気分になる
自分と同じ初級英語話者と英語で話すときは英語が話せる自信が湧く
自分より流暢な中級英語話者と英語で話すときは不安を感じる
自分より流暢な中級英語話者の英語力に圧倒される
自分より流暢な中級英語話者と自己の英語力の差から、英語を話す自信を喪失する
カテゴリー 4: 対話者と自分の英語力の差に対する認識（中級英語学習者のケース）
初級英語話者との意思疎通が成立できない不安でタスクに集中できない
カテゴリー5: 対話者との関係
親しい友人と話すことは楽しいので、話す頻度が上がる

親しい友人には自己開示できるので、話す頻度が上がる
仲が悪い人と話すときは、話す意欲が湧かない
話した事がない人と話すときは、自己開示できず話す頻度が下がる

続いて、Situational L2 WTC に影響を与える要因「タスクコンディションからの影響」について解説する。表 2 は、質的分析より抽出された「タスクコンディションの影響」に関する 4 つのカテゴリー : タスクのトピックへの関心、タスクの難易度、明確なコミュニケーションのゴール、タスク采配の自由度を示している。カテゴリー6 の「タスクトピックへの関心」は、調査対象者は、自分に身近で関連するトピックを含むタスクに取り組むときは、コンテンツを想起しやすく話す意欲が湧くと報告した。例えば、実際のクリスマスシーズン前に、クリスマスパーティーの計画を立てるタスクを行った際は、実際の状況に照らし合わせながら、計画の草案・意見を述べる・発表することなどを楽しんだ。カテゴリー7「タスクの難易度」も英語を話す意欲を左右する傾向にある。調査対象者たちが、認知処理の難易度が低いタスクを行うときは、草案や発話が容易となり、話す意欲が湧く傾向にあった。タスクの難易度は、プレタスク(準備タスク)があると軽減されると述べていた。話す内容が予め準備できていれば、メインタスク時には自信をもち話せたと報告していた。カテゴリー8 は「明確なコミュニケーションゴール」は対象者の英語を話す意欲を駆り立てた。例えば、パーティープランを作るタスクでは、自分の立てたプランと対話者の立てたプランに関して意見交換したうえで、1 つのプランを作成し、発表するというゴールを設定していた。調査対象者たちは、ゴールを目指して、懸命に英語でやり取りする必要に迫られた。最後のタスクコンディションは、カテゴリー9 の「タスク采配の自由度」である。調査対象者たちが、英語能力レベルに関わらず、自分で考えた内容や話題の方向性を自由に采配できるとき、より話す意欲が湧くと回答した。一方、介入授業前に行った英語活動を思い出し、調査対象者たちは、教師が一方的に決めた話題や言語パターンに沿ってインタラクションを取る状況下では、話す意欲が湧かないと回答した。

表 2

タスクコンディションからの影響

カテゴリー 6: タスクトピックへの関心
学習者自身に関連するトピック (例: クリスマス パーティーの計画) は話す意欲が湧く
馴染みのあるトピックは話す意欲が湧く
カテゴリー 7: タスクの難易度
認知処理が低いタスク (例: 将来の計画ではなく過去の出来事について話す) は、話しやすく話す意欲が湧く
準備タスクによりタスク難易度が軽減されると、話しやすく話す意欲が湧く
カテゴリー 8: 明確なコミュニケーションゴール
ゴール(例: 対話者とパーティープランを作る)があると話す意欲が湧く
カテゴリー 9: タスク采配の自由度
自分で話題が選べると話す意欲が湧く
自分で考えた内容なら話す意欲が湧く
教師が選んだ話題は話す意欲が減退する
教師が選んだ言語パターンは話す意欲が減退する

4.2. 研究 2 の結果

研究 2 では、上記介入授業期間、調査対象者の L2 WTC や関連するコミュニケーションの情意がどのように変化したのかを調査した。授業介入時と介入後に 2 回の半構造化インタビューを行い、調査対象者の心理的変化を詳細に記録し、その結果を質的分析した。その結果、3 つの代表的な学習者の変容タイプを抽出した。ここでは、これらの 3 つの代表的な学習者の変容タイプを紹介する。

4.2.1. 英語コミュニケーターとして成長を遂げた初級英語学習者

第 1 のタイプは、様々な肯定的な変化をみせた初級学習者である。それらの変化は、英語コミュニケーター、または英語学習者としての成長を示すものであった。介入初期段階では、彼らは、言語の正確さを気にするあまり、英語使用を躊躇する傾向にあった。そのため、アメリカ人 ALT にも一度も話しかけたことがないと報告していた。しかし、英語コミュニケーションを重ねるうちに、対象者たちは、間違いを恐れず、果敢に発話し、アメリカ人 ALT に授業中、または授業外で積極的にコミュニケーションを取るようになったと報告した。

同時に、彼らの異文化交流願望や動機づけにも変化が見られた。介入開始時に行われたインタビューでは、初級学習者全員が、実生活での英語使用のためではなく、学校の成績と受験の成功という唯一の目標のために英語を学ぶ必要があると報告していた。介入期間中、英語コミュニケーションの経験を積むうちに、彼らは、外国人を助ける国際看護師になりたいや英語圏の国に住するなど、英語を社会で使うイメージ、すなわち「L2 自己像」を思い描けるようになった。

4.2.2 英語コミュニケーターとして成長できない初級英語学習者

第 2 のタイプとして、多くの心理的制限を自身でかけているために、コミュニケーションに対する肯定的な変化を示さなかったある学習者である。第 1 の学習者のタイプとは対照的に、この初級学習者は、英語学習に対する動機づけは高いものの、一連の L2 コミュニケーションタスクを経験した後でも、L2 WTC の低下につながる否定的な感情（対話相手との英語能力の差や自身の不正確な L2 使用に対する不安）を改善できなかった。彼女は、学校の成績や受験のために頑張りたいという英語動機づけのみを持ち、英語でコミュニケーションを取りたいという動機づけを抱くことはできなかった。

4.2.3 高い L2 WTC や動機づけを維持する中級英語学習者

第 3 のタイプとして、高い L2 WTC や動機づけを維持している中級英語学習者である。分析結果から、留学などの過去の豊富な国際交流や英語使用の経験によって、彼らは、揺るぎない高い L2 WTC および L2 WTC 関連のコミュニケーションの情意（L2 動機づけや国際的志向性など）を維持していることがわかった。インタビューの中で、彼らは、英語学習の目的は単に英語の成績や入試のためだけではなく、現在そして未来において異なる文化的背景を持つ人々とコミュニケーションをとるためであると強いイメージを持っていた。すなわち、彼らは確立した英語自己像を持っていた。これらの結果は、同じ英語指導を経験したとしても、学習者はその性質や過去の経験に応じて異なる成長軌跡を示すため、個々の生徒の L2 WTC を育成するには異なるアプローチが必要になる可能性があることを示唆している。

本科学研究費助成により、本研究は、介入授業研究を通して、中学生の英語使用の心理である L2 WTC に関して多くのことを解明し、研究成果を 4 つの論文ならびに 4 つの応用言語学の国際学会で発表することができたことへ深謝の意を表する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Toyoda, J. & Yashima, T	４．巻 Vol.65(1)
２．論文標題 Factors affecting situational willingness to communicate in young EFL learners	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JACET Journal	６．最初と最後の頁 107-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32234/jacetjournal.65.0_107	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Toyoda, J, Yashima, T, & Aubrey, S.	４．巻 43 (2)
２．論文標題 Enhancing situational willingness to communicate in novice EFL learners through task-based learning	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JALT Journal	６．最初と最後の頁 185-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTJJ43.2-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Toyoda,J.	４．巻 115
２．論文標題 Factors affecting L2 Willingness to Communicate in Adolescent EFL learners	５．発行年 2022年
３．雑誌名 関西外国語大学研究論集	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00008017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Toyoda, J.	４．巻 116
２．論文標題 Willingness to Communicate Research in Second Language Learning: From Seed to Development	５．発行年 2022年
３．雑誌名 関西外国語大学研究論集	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Junko Toyoda, Tomoko Yashima, Hiroyo Nakagawa, & Park Moon Yong
２．発表標題 Factors influencing the development of situated L2 willingness to communicate in task-based learning: A mixed method inquiry
３．学会等名 Language in Focus -6th International Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Junko Toyoda & Tomoko Yashima
２．発表標題 Dynamic emotions underlying L2 Willingness to Communicate: Enjoyment, engagement, and anxiety
３．学会等名 3rd International Conference on Situating Strategy in Use (SSU)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Junko Toyoda & Tomoko Yashima
２．発表標題 Factors influencing situated L2 willingness to communicate in task-based learning: A qualitative inquiry
３．学会等名 American Association of Applied Linguistics, 2019 Atlanta（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Junko Toyoda, Tomoko Yashima
２．発表標題 Exploring Growth in Young EFL Learners‘ Speaking and Learning Phycology
３．学会等名 JALT International Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関